

二年生

# ハンドボールと私

西屋 千洋

一年生の終りも近い二月の初旬だった。その頃の私は、バカ程元気な五んがバレーボールをレテていた。とにかくバレーボールは、バレーボールであつた。健康手帖のクラス名の欄が一年、二年、三年と別々に並んであるのを見て、こんなもん一つで結構やわ、と三つも別々な事を書くなんざ、これは絶対に信じられなかつた。自分はこの欄にも母子バレーボールクラスとズラリと並ぶことを、ある満足を持って確信していた。そんなある日、友人の絶大なる勧めによつて他のスポーツを見るのも、又楽しんで言うふうな気分が友人と訪独日本選抜チームと大阪地区選抜チームとの試合を見に行つた。元来、熱レやすい性質なのか、知れなけれども、80近くも熱を上げてしまった。何だか見たら素晴らしいと思ふのだから、毎度のことであつた。さういふ。それから二週間程後に、校内ハンドボール大会があつた。選抜は、皆、とても親しくレマていた。子ばかりだつたから、ワヤヤ言つて走りまわつた。ところが、又、その時の成績が三対三で引き分け、七米スロ、三本づ

つが又、三対三で引分け、続いて一本づつ七米スロ、三本づつ引分け、一対一の負け、三本づつ引分け、二の七米スロ、一本づつ引分け、三本づつ引分け、その悔やレさ？とスピド感への憧れと、今まで何にも知らなかつたハンドボールが、何か大きく心の中にマクされて来た。スピド感、行動範囲の大きさ、外に考えられなかつた私が、ハンドボール以外で考えられなかつた。私が、ハンドボールだ。中学からか、つれて来たバレーボールだ。今は、言わばバレーボールで結ばれた友情であつた。三人共、各々違つた学校だつたけれど、申し合ひせよ、互に誇りと希望を持っていました。それに、私は末っ子であつた。それと、二つと言は、そのそんな時に、バレーボールをやめると宣言したのだ。レか、もた、やめるのではなく、ハンドボールをやめたいとまで……。今から思は、よくあんな事を言つたものだと思ふ。どうしてか、自分ながら、自分のレた事と思ふ

